
BLACK BLOOD

桶本 壮史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLACK BLOOD

【Nコード】

N2937L

【作者名】

桶本 壮史

【あらすじ】

この話は気づいたら異世界（しかもちょっと危ない）にいたっ
ていう感じの類の話です。

コメント等いただけると一人で喜んでいます。

第1話 遭遇（前書き）

初投稿です

半人前です

いたらない所ばかりですが精一杯がんばります

第1話 遭遇

見渡す限り灰色にくすんだ大地ばかりがあった。

そこには生命というものの気配が全く感じられない。

空には雲が立ち込め太陽の光を遮っている。

なんか救いようのないほど殺風景だと思った。

「痛てえ…」

ここは、どこだ？

という考えも最初は浮かんでこなかった。あまりのことに思考は完全にショートしてしまっていた。

しばらく呆然と灰色の大地に突っ立っていた。

持っていたのは携帯と財布に今着ているMEZUNOのジャージ。

そして折りたたみ式の小さなナイフ。でも、なぜこんなところにいるのかが分からない。

「クソツ…なんでこんなところに？」

とりあえず目が冷めたところ周辺は探索したものの見渡す限り灰色の地平線が見えるだけだった。ただただ黙々と歩く、歩く。汗が額から頬を伝い地面へと滴り、小さな跡を残す。

その時だった。

「なんだこの臭いは…」

出し忘れて何日もだしてない生ゴミのような臭いがツン、と鼻を衝いた。とともに、空気の漏れるような音がした。

そいつは常識って何？って感じの姿形でこつちをじっと見つめていた。分かりやすく説明するとすれば馬並の巨軀をしたコリー犬だろう。ただしその体は腐っていた。その深紅の目に射ぬかれると、逃げなければ、喰われるというとても分かりやすい弱肉強食を強烈に

自覚した。その怪物の腐った脚部がたわみ、キレイな放物線を描いて、跳んだ。そいつは跳びながらも巨大な口を唾液を撒き散らしながら広げて向かってくる。ガシュツツという音とともに口が閉じられる。鮮血が噴き出し左肩が筋繊維ごとプチプチと挽千切られるが、まだ生きている。それは本能的動きだった。

「ウワアアアアツ」

こんなところで…。

必死に避ける、避ける。

わけわんねえまま…。

風切り音を伴って振り落ろされる鈍のような爪。一撃一撃が頭を西瓜のようにパツクリと割る威力があるのは深くえぐられて耕されたるうになっっている地面から容易に想像できる。

「死にたくないッ…」

必死に転げまわりながら、震える手をポケットに突っ込むと冷たい鉄の感触がした。折りたたみ式の小さなナイフは情けないほど頼りなかった、が握りしめっていると微かに沸き上がるものがあつた。突っ込んでくる化け物の攻撃をかわして頭に組み付いた。

なんなんだこの生物は？さっきまでは虫ケラのようにのたうちまわっていたというのに？

化け物は困惑していた。

獲物の意外な行動に。

化け物は振り落とそうとするもなかなかしがみついたまま離れない。そのうちにナイフが振り上げられ慣性の法則に従い振り下ろされた。小さなナイフは化け物の左眼球に突き立てられ表面膜の抵抗も虚しくプチツという音とともにズブズブと減り込み、やがて脳にまで達した。

「死にやがれ…。この化け物がああアアツ」

鬼の形相でナイフを引き抜くと今度は右眼球にナイフの柄が埋まるほど突きこんだ。

化け物は突然視界を奪われたうえ、その後自分を襲った激痛に暴れ

狂った。脳を傷つけられ考えることもできない。そしてだんだんその動きも弱々しくなり立っているのもやっとになっていた。

化け物の動きが弱々しくなるのを見計らって頭から降りるともう立っているのもやっとだった。ふらつきながらも朱に染まったナイフを構えるとその喉を一閃した。その喉から噴き出る血を浴びながら薄れる意識の中で人影が近寄って来るのを見た。

「おい…大…夫か…しっか…し…」

目の前が徐々に暗くなっていってそこで意識も途切れたのだった。

第2話 絶望

閉塞呼吸器系単核球症。

なんの前触れもなく発作が起きて心臓が停止してしまう。いつもそれが鎖のように全身に絡み付き見させてはくれなかった。周囲からはいつも憐れむような視線が浴びせられ、両親でさえもまるで腫れ物のような扱いをした。

やめろ…

そんな目でオレをみるな…「見るなアツ」

「おお…目覚めたようじゃの？」

目覚めるとそこは小さな部屋の中だった。所狭しと並べられた不思議な形をした器具の山やうず高く積み上げられた本の陰からでてきたのは老戦士といった風貌の頑強な体つきの老人だった。

「ここ…は？」体を起こしながら尋ねると、

「灰色大地の西端とゴルドアの街とのちょうど境目じゃ。」

灰色大地？ゴルドア？なんだそれ。

そしてどう見ても日本人ではないオッサン。

これはとんでもない状況なのではないのか？いろんなことが頭に浮かんだ。

ニュースでやってた拉致事件だとか、どこかの国のテロ組織による…など。

だとしたら、下手に刺激するのはいろいろマズイのではないか？ここはドッキリといった伏線も頭にいれつつ慎重に行動しよう。

「あのごとこのどちらのどなた様でございますでしょうか？」

老人はその言い方にあからさまな引いた態度をとりつつも、
「気色悪い奴じゃの…だから灰色大地じゃと言っておるうが」
だからその灰色大地っていうのが分からないんだってと、心の中で
喚いた。

「ここ日本ですよね？そうですよね…あつ分かったぞ〜おじさんも
人が悪いな。これ…ドッキリなんですよね？」

と、ニヤニヤしながら言った。いまいち状況がつかめないな。

「ニッポン？はてさてそんな国は聞いたことがないのう。お主は灰
色大地のど真ん中でデビルドッグの死体の側で倒れておったのじゃ
から」

老人は豊かな髭をしごきながらにこやかに言い放ったのだった。そ
の顔からは嘘を言っているのではないことがうかがえる。

そして一つの結論に達した。もしかしてこの人はイツちゃってる人
なのではないのかと…だとすれば一刻も早く逃げないといけない。
ベットから飛び起きると、ドアに向かって走り出し、思いっきり開
け放った。目の前には前にも見たような灰色の無機質な景色が、再
び嘲笑うかのごとく広がっていた。

第3話 狭間

目の前に広がる灰色の世界には他の色を感じることができない。

命を感じられない。

信じられない。

不意に呼吸ができなくなる。

意識が世界に引きずり込まれていった。

妙だ。変だ。おかしい。ここへは来たことがある。ニヤニヤと笑う真つ黒な太陽が真つ黒な光を発している。その光景は狂喜的ななにか異質なものを感じさせた。果てしなく伸びた無数の真つ白な塔が光を浴びて苦しげだった。その間をフワフワと浮かぶ光の玉が往き来している。よくみれば光の玉は一行儀よく並んでいた。

「おい…何をしている」
不意に声がした。

そこにはなんとも言い表せない何かがあった。ただどうしても言い表すことは出来ない。ただただ強烈な存在感を感じさせた。

「ここは狭間の世界、仮の世界だ。長居するような場所ではない」
その存在はそう囁くようにいうと、より一層巨大な存在感を発した。

「物質界、マテリアルプレーンとカオスプレーン、混沌界との狭間を旅するお前にも選択の時がきた。お前にはどこに自分の存在を示

すのか選択権が与えられた」

なんなんだろう。頭、いや…なんなんだ。なぜか自分の存在が曖昧になっている気がする。このまま消えてなくなりそうだ。

「お前の存在はこの狭間の世界から拒絶されているのだ。お前は選択しなければならぬ。」

選択なんて、したくない。自分に存在なんてものがあつたのかどうかすら分からない。でも、その選択は、どうあつてもしなければいけなかった。

「俺…は……………」

その存在は更に大きな存在を示すと、その言葉を承諾したような気がした。だんだんと薄れ行く意識の中でプツリと糸が切れたような感触がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2937/>

BLACK BLOOD

2011年10月7日01時43分発行